

原 著

学生相談における早期中断例についての一考察

西村智代 島田 修

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(平成7年10月18日受理)

Speculation on the Two Cases of Student Counseling which were
Discontinued at an Early Stage

Tomoyo NISHIMURA and Osamu SHIMADA

*Department of Clinical Psychology
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Oct. 18, 1995)*

Key words : student counseling, counselor, client, discontinued case

Abstract

I have considered the cause, the reason and the meaning of the discontinuity at an early stage in the two cases of student counseling.

They were studied from the following viewpoints : the counselor's factor, the clients' factor and the factor of the structure of the student counseling.

At first, I have discussed that the structure of the interview was unclear and that there was not enough agreement on the contract for the interview between the clients and the counselor.

Then it was noticed that there was a gap between the counselor understanding of the clients' needs and what they really expected of the counselor. Also, it was necessary to consider how mentally healthy those clients were.

Furthermore, it was pointed out that the system of the student counseling overall in our university should be reorganized including intakes.

要 約

学生相談において早期に中断に至った二例について、中断の原因や理由、その意味などを、

治療者側の要因、来談者側の要因、学生相談室の構造的な側面から考察した。

まず、面接の構造化が明確になされておらず、面接の契約について相互了解が不十分であったことが挙げられた。また治療者は、来談者の期待とずれたところに関わっていたことが様々な点から明らかになった。来談者については、その「健康さ」が考えられた。さらに本学の学生相談のあり方について、インテーク機能の充実の必要性を始め、十分に整備されていない点が指摘された。

はじめに

学生相談に関わって一年目の終わりに、「学生相談室は、定期的にやってくる学生もいれば不定期に困った時だけやってくる学生、一度だけで元気になる学生と様々である。みんなそれぞれ自分にぴったりの利用の仕方を知っていて、その人なりに“ここまでは自分でやっていける”という力を持っているのだと改めて気づいた」¹⁾との感想を持った。この考えは基本的には変わらず、中断例についても、「きっと元気にやっているだろう」「困ったらまた来談するだろう」と、本人の力を信じ、どこか楽観的に捉えているところがあった。しかし、更にこの数年間学生と関わってきて、中断例について、その原因や意味を様々な角度から考える必要性を感じ始めた。

今回は、中断することをカウンセラー自身が予測できずに、ごく早期に中断に至った二例について、中断の原因や理由、その意味などを、治療者側の要因、来談者側の要因、学生相談の構造的な側面から考察した。

学生相談室について

本館八階東ウイングの一室である。普段は閉室しており、使用時のみ開ける。入ってすぐ応接セットが置いてあり、事務机が二つある。それで部屋がいっぱいになる程度の広さである。壁には三方に印象派の画家の絵が三枚掛けられているが、飾り気のない部屋である。学生はまず二階事務室の学生課に出向き、相談したい旨を伝え、学生課の職員が簡単に相談内容を聴取し(その内容は受付票に記入)、その後職員よりカウンセラーに連絡が入ることになっている。筆者のところに相談に来た学生について言えば、「女性のカウンセラーがいい」「臨床心理学科の先生がいい」との希望にて来る者もいれば、学

生課職員により「臨床心理学科の教員」が選択された後、本学科長より筆者が指名される場合もある。いずれにしても学生は初回面接で会うまでは筆者の顔や、筆者がどんな人物かを知らない。従って筆者を積極的に選択したわけではない。受付票には、学生課の応対日、応対者、相談者の学部学科名、学年、学籍番号、氏名と、相談内容、経過と処置が極めて簡潔に記されている。受理面接から全て筆者が行うことになる。

ケースの概要

1. ケース1 (女性、一回生)

1) 来談までの経緯

学生課職員が記入した受付票に「進路変更(商業関係)を希望。そのことについて心理の専門家の意見を聞いてみてはどうかとの学科教員の勧めにより来談。時に自分をセーブできなくなるという心理面についても聞きたい。」とある。本人が「臨床心理学科の教員」「女性」を希望していることより、筆者が担当することになる。

2) 面接の経過

Coはカウンセラー(筆者)、CIは来談者(学生)を示す。またCoの発言を<>で、CIの発言を「」で表す。#はセッション数。

<#1>ショートカットにミニスカート。元気で活発な女の子という第一印象。表情良く、ニコニコ。<困っていること?>に「何から話していいのか分からないんだけど……。 (少し困りながら) 座って授業を受けているのが苦痛。」大学の選択について尋ねると、「本大学のことを詳しくは知らずに来た。高校時代より商業関係に興味があったが、親に反対されたこともあって、この道を選んだ。」と不本意入学であったことを述べる。「毎日学校には来ているが、授業が嫌で、すぐに帰る。」「学校を辞めても何をやりたいというのがあり過ぎて、ないというか。」<?>「商

業関係の勉強もしたいし、就職してもいいような気がする。何もせずに1年ぐらいゆっくりしようかな、とも思う。」「でも辞めたらまた同じ繰り返しになるのではないかと不安もある。」

「入学してすぐ自分の学びたいことと違うと思い、親に進路変更のことを言ったけど、“今のところで頑張らないと駄目だ”と即答されて、聞いてもらえなかった。」(涙を流す。)「全く取り合ってもらえなかったのね。」>「周りの友人も嫌。リーダー格の人がいて、その人の機嫌が悪いと、のろのろしている自分に当たられる。自分がどんどん消費されていく気がする。」(涙)「消費されていくという感じ、分かるような気がする。つらいよね……。」>「でも、その人から逃げているのが自分で分かるのも不本意。」「前は(自分は)こんなふうじうじしてなくて、活発な方だと思っていたのに。」<思っていた自分と違う?>「ええ。」(涙) CoはできるだけCIの気持ちを感じつつ、話を聞き続けることに努める。ほとんどの時間をCIが話す。「いろいろ自分で考えるけど、どれも最後までいかない。中途半端に終わっている。」<堂々巡り?>「そう。やっぱり答えが知りたい。」<いくら考えても堂々巡りする……。すっきりしないで、きついねえ。答えがこれだと教えることはできないし、私自身も、答えが分かっているわけではないけど……。ここで話をしていくうちに少しずつ整理されて楽になる部分があるかもしれない。少し余裕が持てて、いろいろ考えられるかもしれない。堂々巡りから抜け出せるかもしれない。しばらく続けて来てみない?>「はい。」一週間後に約束する。

*涙をポロポロ最後まで流している。どうしたらいいか分からない様子、きつさが伝わってくる。(※は当時 Co が感じたこと、考えたことなどを示す。)

<#2>キャンセル。CIは約束の時間にやってきて、「授業に出てて、気分が悪くなっちゃった。本当に申し訳ない。ごめんなさい。ごめんなさい。」と何度も謝って帰る。

*自分を出すことに抵抗があるのか。前回、いろいろなことを一度に自己開示しすぎて不安感を募らせたのか。Coが侵入的だったか。しか

し、#1はCIが自由に話すのを聞いて時間が経ったような印象であり、Coからは積極的に働きかけておらず、CIを脅かしてはいないと思うが、また、CoはCIが特に内面を喋り過ぎる感じも面接中受けていない。

<#3>10分遅れてくる。「遅れてごめんなさい。」とすぐに謝る。「ごめんなさい」が多い。趣味であるピアノ演奏の話。「すごく楽しい!」と目を輝かせて話す。Coの知らない分野なので、いろいろ教わる。好きな作家の話。また毎日の生活について、ピアノを弾いたり、テレビを観たりしていることが多いこと、部屋の掃除が好きで、掃除をするとすっきりすることなど話す。元気に、表情豊かに話す。その後、「周りの人は、授業に出て勉強さえしていればいいと思っている。“大学休んで何をしているの?”と言われてびっくりした。いろいろすることあるのに。何か違うと思う。私と同じような考えの人がいない。」ある意味で、周りの人より彼女の方が自立しているのかもしれないと思い、そのことを伝える。ここまで話したところで1時間が経っている。Coは終了しようかと思い、<他に今日これだけは話しておきたいことがあれば……。>と言うと、「高校時代、突然体中の血の気が引いて、何かに取り憑かれているような感じになったことがあった。自分の体のようじゃなくて、フワフワして、車が飛び込んでくるのではないかと、後ろから刺されるのではないかとか思って、ものすごく怖かった。近医で安定剤をもらって、2、3日で落ち着いた。その後も、2回くらい同じようなことがあった。その時も安定剤で落ち着いた。特に原因は思い当たらない。成績も良くて、楽しくて、一番良い時だった。特にストレスもないし。原因が知りたくて、いろいろ本を読んだけど、分からない。どうしてそうなるんですか。」と一息に話す。続けて「そういえば小学生の頃、外に泊まると、興奮して眠れなかった。天井が迫ってくる感じがして。すごく頑張った後とかにそうになっていたみたい。」*Coは、この不安が、CIが相談にやってきた大きな理由の一つであろうと感じ、丁寧に扱いたいと思った。<原因が分からずにそうなり、とても不安……。いろいろ考えられるのだろうけど、

私にも、どうしてそうなるか、すぐには分からない。いろいろ考えたり調べたりしてみたいので、少し時間が欲しい。また今度、時間がある時に、ゆっくりこの話をしましょう。今日はそれぐらいしか答えられないけど、いいかな。>「はい。」次回は試験期間に入り、いつ来談できるか予定が分からないとのことなので、都合がよい日に Co の研究室に電話をもらうことにする。

*わりと元気で表情は大変豊か。*すぐに謝るところなど、Co に気を使っているよう。*大学への「合わなさ」は、ある意味では健康な部分ではないか。全体にただ従うのではなく、疑問を持つことができる力ともいえる。*繊細なところがあるようだが、特に病的な感じは受けないが……。

以後、連絡がなく、中断となる。

2. ケース2 (女性, 二回生)

1) 来談までの経緯

学生課の受付票には「自分が何をやってよいかわからない。何となく毎日を過ごしているだけ。目標や生きがいを見つけない。」とある。学生課職員より本学科長に依頼があり、学科長の指名により筆者が担当することになる。

2) 面接の経過

<#1> 痩身。こざっぱりした服装。ニコニコと愛想が良い。<相談しようと思ったのは?>「生き方の問題。今までやってきたことに嫌気がさしてきた。正しいと思ってやってきたことに疑問を持ち始めた。」<どうということか、もう少し教えてくれる?>「福祉活動を、自分の道と思ってやってきた。人のために生きたいと思って。授業も、知識を身に付けて人の役に立つように、と思っていたけど……。ボランティア活動も、人のために、よし、やってやろう、と何の疑問もなくやっていた。それは自己満足に過ぎないのではないかしらと思いついて、嫌になった。ボランティア活動をして、友人より優位に立とうとしているような。」<何かきっかけが?>「人になぜ福祉を目指すのかと聞かれて、ちゃんと言えなくて、そういう自分に疑問を持った。それと、“青年期の心理”という本を読んで、何の変哲もない自分に疑問を持った。もっと何かしなければ(思った)。アイデンティティを確立さ

せなければとか自分の方向をはっきりさせなければと思った。」「今は授業に身が入らない。」<ここに来て、こうなったらいいなの?>「今の状態から脱したい。前みたいに(前向きに、意欲的に)ボランティアや授業に取り組むようになりたい。」

*Co は Cl の話を聞くことに徹した。ほとんどの時間を Cl が話し、Co は時々明確化しながら聞いていく。

<#2> スポーツのサークルやアルバイトの話。サークルには適度に参加し、友人関係も良い。前回に続きボランティアの話になる。「(機能回復訓練のボランティアを) やっている時は一生懸命。それだけに、終わって、何も得られなかったと感じてしまう。いつもの繰り返しをやっただけ。本当に回復して欲しい気持ちを持ってるのかなと思う。何かを求めたらいけないんですかねえ。自分を犠牲にしなきゃいけないのかな。(実感がこもっている。)何かを得よう得ようとしている。本当はそんなことを思っていないのではないかなと思う。でも何かを得たい。そうすると相手のことを考えていないのではないかなと思えてくる。」<すごくよく分かる気がする。何かを得たい気持ち……。でも何かを得たいと思うのは、自分のことばかり考えて、相手のことを本当には考えていないのではないかなと思えてくる……。>「最近、気ままな生活。今迄は無理して授業に行っていたが、今は無理に行かない。固い考えを楽にしたら、友人に“逃げだ”と言われた。そうかもしれないと思ってきた。」<逃げてはいけないのかなあ。>「うーん……。」「人の話や本で自分の意見を変えるのはいけないんですかねえ?」<なぜ?>「人に批判された。」<何と?>「人の影響ばかり受けていると言われた。悪いことかなあと。自分では良いことと思っていたのに。それを認めてもらえなかった。」<うーん……。そう思うしてしまうことで、そう言った人の影響をまた受けている。>「そうですねえ。」<認めてもらいたい気持ちが強い……。>「そうですねえ。見栄っぱりだからかなあ。」

*人に影響され易く、揺さぶられやすい。自信のなさがあるのか。*認められたい気持ちの

強さ。*Co は喋りすぎか、一生懸命何かを与えようとしているようだ。*Cl はニコニコしていて、Co の話に対してどのように感じているのかわかりにくい。Co に反論したり自己主張できるようにになったりしたら良いのではないか。

<#3>時間前に来て待っている。「休暇中にいろいろな施設に行って、自分に合うところを探すつもり。就職にもつながるし。」<福祉の仕事をやろうと?>「しかないでしょうねえ。(笑)」*福祉の仕事をしていくことへの迷いが随分ふっきてきたのか。「相手はこうしてくれるだろうと思っても、自分の意に反した行動をとられると頭に来て…。自分のことを分かってもらえていない気になる。」<そう感じたら?>「その人と合わないなあと思って、自分から話す気になれない。」「今迄仲間外れになりたくなくて皆に合わせてきた。今は合わせるのをやめた。」

*“自分と合わない”と切り離すことで、怒りや傷つきを抑えようとしているのではないか。
*常にニコニコして「はい、はい」「そうですねえ」と言うので、Cl の気持ちが分かりにくい。

<同じように、Co に“分かってもらえていない”という感じは?>「ないですねえ。年齢が上の人とか心理学科の人とかの話の聞くと、すごいなあ、正しいなあと思うんです。」

*Co の言うことに対し疑問を持つことができるようになること、それを伝えられることが課題か。
*Cl の相手への期待や、“～して欲しい”という気持ちが相手に伝わっていない。→“期待に添ってもらえなかった”“分かってもらえなかった”と傷つく。→“この人とは合わない”と切り離す。一方、相手はなぜ Cl が離れていったのか分からない。このように、Cl の中でのみの循環になっているのではないか。

<#4>カウンセリングのためだけに大雨の中やってくる。「前ほどこの問題に煩わされなくなった。それほど悩んだり考え込んだりしない。」「今は考えと行動がどれだけ一致するのか知るためにボランティアに行っている。以前とちょっとは違うと思う。」<どんなところが?>「以前はやらされる感じが強くて、任されたことだけをやってた。今は自分から進んで動いていると思う。」大学が長期休暇に入るので、今まで

のことをまとめておく。(1)福祉の道に進みたいのか、なぜ福祉をやっているかと思うのかという問題については、Cl がきつくなければ抱え続けていく。何年か何十年か経って分かるかもしれない。あるいはすぐ分かることかもしれない。とても大事なことだと思うので、できれば考え続けていくと良いと思う。(2)友人関係について、Co が#3 後に考えた、Cl の中だけでの循環について、説明してみる。(3)人に認めて欲しい気持ちが極めて強いことについて話し、それがなぜか自分なりに考えてみるよう伝える。(4)福祉だけでなく、小説を読むとか趣味を広げるとか、別の分野に少し目を向けて、この休みを過ごしてみることを提案する。

次回の約束については設定せず、休暇後、Cl より電話をもらうことにしていたが、電話はなく、中断となる。

(なおケースの概要については、プライバシー保護のため、本質的な部分に影響を与えない範囲で修正を加えた。)

考 察

学生相談として関わった二例に共通した点は、一つは、自我同一性の形成における不安定な感情がひきおこした問題を持っていたことである。今一つは、現代の大学生にみられる、傷つくことを怖れる対人関係のあり様を示しているということであった。つまりある一定の方向に向き、周りと同じ枠の中に入っていないことから生じる不安を抱いていたといえる。

筆者自身には、最後までクライアントとの関係は良いと感じられており、コミュニケーションのあり方にも問題は感じられなかったのに、

(長期の休暇を契機にしてではあるが) 思いがけず中断してしまったケースである。いずれも健康度は高いと思われ、ラポールを基盤にして、支持的なカウンセリングを行なっていた。

ケース1では、#2はキャンセル、#3では遅刻と、早くから抵抗と考えられる行動がみられた。この時点で、自分を表出することに抵抗があるのか、カウンセラー側の要因として侵入的になっていなかったかなど振り返ってみた。#1

では最後まで涙を流して辛さを訴えるが、今迄一人で心の中にためていたものを思いっきり吐き出した感じがし、そのことで多少とも楽になったのではないかと思われた。また#3では、高校時代の発作のエピソードを話し、「なぜこんなことが起こるんだろう」「また起きたらどうしよう」など、おそらくいつも持ち続けてきたであろう内面の不安を言葉にできたと思われた。しかし今まで抱いていた「こんなにうじうじしてなくて活潑な自分（#1）」のイメージと、今ここにいる「辛くてこんなに涙が出る（弱い自分）」とのギャップは大きく、クライアントはこの「弱い自分」を受け入れることが難しかったのかもしれない。「（苦手な人から）逃げているのが自分で分かるのも不本意（#1）」などの発言からもクライアントが大変頑張り屋であることがうかがわれるが、そのようなクライアントであるから、「弱い自分」を認められず、またカウンセラーに上手に頼ることもできず、「カウンセラーに頼っている自分が嫌」だったのかもしれない。

#3では、なぜ発作が起こるのかとても知りたがっているように思われたのだが、それを聞くこともなく来談しなくなった。#3の最後の＜また今度、ゆっくりこの話をしましょう＞というカウンセラーの提案に対する反応と考えるならば、それを話し合うことによって、「進路変更」という、より表面的なテーマから内面の問題へ入っていくことを感じ取り、それを怖れたのではなからうか。より内面的な問題をみていくことについて、クライアントにはまだ準備状態ができていなかったと思われる。それは別の言い方をすれば、クライアントはそこまでカウンセラーには望んでおらず、カウンセラーは知らず知らずのうちに必要とされている以上のところまで入り込もうとしていたのではなからうか。そう考えると、この時のカウンセラーは侵入的だと受け取られていたかもしれない。さらにカウンセラー側の要因を考えるならば、クライアントはカウンセラーに大変気を使っていることが感じ取られたが、もっとクライアントが楽にいられる面接の構造化に配慮する必要もあったように思う。また、#3終了時に次回の約束をし

ていた方が良かったのではないか。

面接の構造化の問題として、面接契約がクライアントとカウンセラーに意識されていなかったことがあげられる。クライアントの来談目的についてはクライアント、カウンセラーの双方に相互理解が得られていた。しかし、「面接の方法」「面接時間」「秘密の厳守」「面接終了予定時刻」などについてカウンセラーの説明は不十分であり、そのために相互理解がクライアントの側に不全なままにあった。面接の構造化を明確にすることにより、クライアントとカウンセラーの両者が保護され、心理的に自然な相互交流が図られるし、クライアントにカウンセラーが侵入的をとられることを防ぐことができ、クライアントによる過度の自己開示も防ぐことができたであろう。

ケース2については、まずカウンセラーの関わり方について考えねばならない。第一にカウンセラーが一生懸命「アドバイス」しようとして、かなり精力的に喋っていたことが指摘されよう。#2の後に、“カウンセラーは喋り過ぎ。一生懸命何かを与えようとしているのではないか。カウンセリングが役に立つものと思って欲しいのか。”との振り返りをしている。しかし、続く面接でもその関わり方は変化していない。また、クライアントは自分を認めてもらいたい気持ちが強いと指摘していたにも関わらず、カウンセラー自身がクライアントを認められていなかったように思う。面接記録を省みても、クライアントを認めるような発言がみられないことに気づく。その中であってカウンセラーもまたクライアントに認められたいと強く思っていたようだ。

さらにカウンセラーは、＜カウンセラーに反論したり自己主張したりするように＞という二重拘束的なメッセージを与えていた。つまり、これによってクライアントがカウンセラーに反論したり自己主張したりしても、それはカウンセラーに従ってしまうことになるわけである。このことはクライアントを極めて不自由にし、混乱させていたと思われる。このことに関して考えるならば、来談しなくなったことこそクライアントの自己主張であり、これを喜ぶべきかも

しれない。今迄「人の話で自分の意見を変え」、「人の影響ばかり受けて」きたクライアントであるが、ボランティアでの関わり方が変わってきたように（#4）、日常場面でも「自分から進んで」、自主的に、自分自身の意見や判断で動けるようになったのかもしれない。

#3では、迷っていた福祉の仕事に「就くしかないでしょうねえ」と話し、積極的に施設訪問を始めたり、#4では、「前ほどこの問題に煩わされなくなった」（ボランティアで）今は自分から進んで動いている」などの発言もみられ、クライアントの中で一区切りついたのではないかという思いもある。だからこそカウンセラーも#4の終わりにこれまでの面接をまとめておこうという気になったのかもしれない。もともと健康度は高く、力を持っているクライアントであったために、自分なりに整理できたのではなかろうか。

しかし気になるのは、友人関係における本人のパターンが、カウンセラーとの間でも繰り返されたように思われることである。つまりクライアントはカウンセラーに対しても「自分のことを分かってもらえていない」「期待に添ってもらえない」という気持ちを抱いていたのではないか。だからクライアントはカウンセラーを切り離してしまい、「話す気にならない」と来談しなくなったのではないだろうか。クライアントはカウンセラーとの間でも傷つきを体験したであろうか。おそらく、この傷つきをカウンセラーにぶつけ、そのことについて話し合い、共にこれを乗り越えていくことができたならば、今後の友人との関係も変わってきたであろう。この時点でクライアントとの関係が途切れてしまわなければ、ここでのカウンセラーとの関係づくりは大きなチャンスであったと思われる。

各ケースについて、限られた面接記録より、中断の原因や意味について考えてきた。いずれも推論の域を出るものではないが、様々なことが考えられた。まずカウンセラーについては、クライアントの期待とややずれたところで関わっていたことが多いように思われた。そのためケース1では侵入的だと受け取られていたことも予測されるし、ケース2では「認められた

い」クライアントを十分に認められないまま、別の面に一生懸命関わろうとしていたように思われる。カウンセラーの頭の中でのクライアント理解と実際の関わりがずれていたことも明らかである。クライアントに対して、二重拘束的なメッセージを与えていたことにも気づかされた。

クライアント側の要因については、一つにはやはり「健康さ」が挙げられよう。ケース2では、自分なりに一区切りつき、整理ができたことによる中断とも考えられるし、ケース1が「進路変更の相談」に留まろうとしたのも、ある意味では健康さと言えないだろうか。そして、両者とも何十回も続くカウンセリングを望んでいるわけではなかったのかもしれない。

学生相談のあり方は、その大学の規模や総合、単科、女子大等の、大学の内容によって違ってくる。その援助活動もガイダンス、カウンセリング、サイコセラピーとカウンセラーにとって異なった姿勢が求められることから、「カウンセリング部門」「学生指導部門」と役割機能を分化させることも必要であろう。このような役割機能を分化させたもので、九州大学の学生相談活動がモデルとして高く評価されている。九州大学のカウンセリング部門には教授1名、助教授1名、インテーカー1名が、学生指導部門には2名が配属されている^{2),3)}。

本学の学生相談のあり方には、援助関係の構造上、十分に整備されていないところがある。使用する時にだけ部屋を開けるのではなく、常時そこにカウンセラーがいて、必要な時にいつでも利用できるような相談室であるべきである。できればカウンセラーは複数いて、クライアントがカウンセラーを選択する余地があるのが理想的である。カウンセラーにとっても、クライアントをより適切なカウンセラーに紹介できることは必要であろう。本例では、学科長の指名により筆者が担当することになったが、クライアントがカウンセラーを選択することができたなら、別のタイプのカウンセラーだったら、これら二例の援助関係は別の展開をみせていたかもしれない。本来は受理面接を行い、来談した学生の問題の性質を見当づけるため、ケース検討

をしたうえで担当者を決めることが望ましい。
最近の学生の悩みや相談ごとの訴えは定型的で
はなく、インテーク機能の充実を欠くことがで
きない。今後、学生がより気軽に自由に利用で
きる学生相談室のあり方について考えていく必
要性を指摘して、本論を終わりたい。

謝 辞

ケースとして提示することを快く承諾し、さらに
温かい励ましまで下さったお二人に心より感謝しま
す。また大変お世話になりました清水裕子氏に感謝
いたします。

文 献

- 1) 西村智代(1992) 学生相談業務に携わって感じたこと. 西南学院大学学生相談室報, 6, 9—10.
- 2) 全国学生相談研究会議編(1992) 現代学生へのアプローチ. 現代のエスプリ 294, 至文堂, pp159—161.
- 3) 村山正治(1992) カウンセリングと教育. 初版, ナカニシヤ出版, 京都, pp147—159.
- 4) 鑢幹八郎, 上里一郎編(1982) 自我同一性の病理と臨床. 初版, ナカニシヤ出版, 京都.
- 5) 下山晴彦, 峰松 修, 保坂 亨, 松原達哉, 林 昭仁, 齋藤憲司(1991) 学生相談における心理臨床モデル
の研究. 心理臨床学研究, 9(1), 55—69.
- 6) 鶴田和美(1995) 学生相談における時間の意味. 心理臨床学研究, 12(4), 297—307.
- 7) 全国学生相談研究会議編(1991) キャンパスカウンセリング. 現代のエスプリ 293, 至文堂.
- 8) 全国学生相談研究会議編(1992) キャンパスでの心理臨床. 現代のエスプリ 296, 至文堂.
- 9) 山崎久美子編(1989) 大学生のメンタルヘルス. 現代のエスプリ 266, 至文堂.